

報告

「With コロナ」時代における初年次セミナーのあり方

— 立命館アジア太平洋大学における実践の結果を踏まえて —

立 山 博 邦・カッティング 美紀
筒 井 久美子

要 旨

本稿では、2020年度前期にコロナ禍で急遽、対面に代えて同時双方向型（同期型）のオンライン授業として実施された立命館アジア太平洋大学の初年次セミナー「スタディスキル・アカデミックライティング（SSAW）」の実践とその結果を報告する。SSAWは、大学で学ぶための技能の習得、大学で学ぶための態度の形成、大学への社会的統合を目的とし、授業方法においては学部生TAの活用と協調学習を特徴としている。これらの目的・授業方法はオンライン授業にそのまま引き継がれた。受講生およびTA対象のアンケートの結果、オンラインによるSSAWは、学習技能の習得には有効であったが、学習態度の形成と大学への社会的統合という点では比較的に有効性が低かったこと、また、その理由として、オンライン授業であるがゆえに学部生TAの活用と協調学習の多様な効果が限定的にしか表れなかったことが明らかになった。これを踏まえ、今後のSSAWのあり方を検討する。

キーワード

「With コロナ」時代、同時双方向型オンライン授業、初年次教育、初年次セミナー、学部生ティーチングアシスタント、協調学習

1 はじめに

2020年度前期、突如として世界中に猛威を振るった新型コロナウイルス感染症によりほとんどの大学で入構が禁止となり、これまであたり前におこなわれていた対面による授業の継続が困難となった。こうした状況の中、急速に導入が進んだのがインターネットを利用したオンラインによる授業である。eラーニング戦略研究所が2020年6月初旬に全国の大学教職員を対象に実施した調査によれば（ $n = 100$ ）、大学におけるオンライン授業の実施率は97%にも上る。オンライン授業の形式については、「授業録画配信（オンデマンド）型」77.3%、「ライブ授業配信（同時双方向）型」76.3%、「資料配信」62.9%、「ウェブ会議システムを使ったディスカッション」36.1%、「チャット/掲示板などで質問や議論を行う」24.7%などとなった。オンライン授業の実

施に際し使用されているシステムは Zoom (75.3%) が突出して多かった。また、今後は授業のオンライン化がさらに進み、対面とオンラインのハイブリッドが一般的になるとみる大学が多いことも明らかとなった。筆者らが勤務する立命館アジア太平洋大学 (以下、「APU」) においても、急遽、全面的に Zoom による同時双方向型オンライン授業がおこなわれ、現在、「With コロナ」時代を見据えて対面とオンライン (同時双方向) のハイブリッド型授業の実施が模索されている。

大学授業の急激なオンライン化が新生に与えた影響は大きかったようである。APU が 2020 年 7 月下旬に在學生を対象に実施したアンケートによると (n = 1,446)、1 セメスター生 (n = 281) の 69.8% が「今の状況に困難さや不安を感じている」と回答し (全學生では 63.7%)、57.7% が「授業がオンラインになったことや海外派遣プログラムが中止になったことによって春セメスターに実行しようと考えていた学修計画に影響があった」と回答している (全學生では 45.5%)。また、「友人ができるか不安」と回答した 1 セメスター生は 51.6% (全學生では 22.6%)、「友人と会う機会」を作るためのサポートが必要と回答した 1 セメスター生は 37.7% (全學生では 20.1%) となっている。2020 年春の入学者の大学生活は、通常よりも不利な状況で始まったと言える。

このような新生に対して、2020 年度前期に実施された初年次セミナー (またはゼミナール) はその目的を十分果たすことができたであろうか。初年次セミナーとは、初年次教育、つまり新生の高校からの移行と大学への学問的・社会的適応を支援することを目的とした少数数制・双方向型の正課科目を指す。これは、大学全入時代が到来し、学力面で準備不足というだけでなく、そもそも学習意欲や目的意識が希薄なまま進学する学生が増加したことを受けて注目され始めた初年次教育の最も一般的な形態であり、今や全国の大学で提供されている (河合塾 2010)。しかし、ほとんどの初年次セミナー担当者にとって今回がこれまでと大きく違うところは、オンラインで授業をおこなわなければならなかったことである。学術的には、オンライン授業は対面授業よりも学習効果が優れている傾向があることが明らかになっている (U.S. Department of Education 2010)。しかし、この結論は、知識や技能の習得度のみで学習効果を測ることを前提としている。初年次セミナーにおいては、大学で学ぶための技能、すなわちスタディスキルの習得だけでなく、大学で学ぶための態度の形成や大学への社会的統合も促して学習効果を追求する。後者については、同時双方向型であっても、オンライン授業では指導が難しい側面があるため学習効果が表れにくい可能性がある。もし、2020 年度前期にオンラインで実施された初年次セミナーが、期待されている学習効果を十分に発揮することができなかつたとすれば、受講生に対して早急に補習的措置を講じる必要がある。また、その理由が特定できれば、これからの「With コロナ」時代に、初年次セミナーを対面だけでなくオンラインでも有効なものにしていくための検討材料となる。

本稿では、2020 年度前期にコロナ禍で急遽、対面に代えて Zoom によるオンラインで実施された APU の初年次セミナー「スタディスキル・アカデミックライティング (以下、「SSAW」)」の実践とその結果を報告する。以下、まず、SSAW の概要を示したうえで、授業をどのようにオンラインで実践したかを説明する。次に、受講生と彼らをサポートする学部生ティーチングアシスタント (以下、「TA」) を対象に全授業の後に実施したアンケートの概要と結果を示す。最後に、その結果を踏まえ、オンラインによる SSAW の効果と今後の SSAW のあり方について考察する。

2 オンラインによる「スタディスキル・アカデミックライティング (SSAW)」の実践

SSAW は、国内学生であれ、国際学生（留学生）であれ、新入生が最初のセメスターに必ず履修しなければならない科目（2単位）である。クラスは日英言語基準別かつ学部横断的に編成される。1クラスの定員は最大60名と一般的な初年次セミナー（20～40名）よりも多いが、1つのクラスを5つの小クラスに分け、それぞれの小クラス（最大12名）に学部生TAを1名配置することによって少人数制を実現している。授業設計は教育開発・学修支援センター（以下、「EDLSC」）の教員がおこない、各学部・センターから選出された教員が共通の教案・教材を使って授業をおこなう。2020年度前期において、日本語基準では11クラス編成のもと、11名の教員、55名のTA、656名の受講生が関わり、英語基準では4クラス編成のもと、4名の教員、20名のTA、149名の受講生が関わった。この大所帯でのSSAWの急激なオンライン化には当初不安の声があったが、結果として大きな混乱は生じなかった。その理由として、授業設計者であるEDLSC教員を起点としたトップダウンの管理方式がうまく機能したことが考えられる。

本稿では、SSAWの日本語基準クラスについてのみ報告する。以下、SSAWの目的・到達目標と授業方法を説明する。

2.1 目的および到達目標

SSAWはその名の通り、新入生が学術的文章の書き方を中心に、大学で学ぶための技能を習得することを目的としているが、大学で学ぶための態度の形成と大学への社会的統合も等しく目指している。SSAWにおける受講生の到達目標を表1に列挙する。これらの目的および到達目標はオンライン授業においてもそのまま引き継がれた。

表1 受講生の到達目標

1	自らの疑問や関心に基づいて適切に問いを立てることができる	大学で学ぶための技能
2	答えを導く方法を適切に選択し、遂行することができる	
3	信頼できる情報を的確に収集することができる	
4	情報を批判的に分析することができる	
5	思考を論理的に整理することができる	
6	2000字程度の（論証型）レポートを作成することができる	
7	8分程度の（論証型）プレゼンテーションをすることができる	
8	大学で学ぶことに対する不安が和らぐ	大学で学ぶための態度
9	学ぶ意欲が高まる	
10	主体的に学ぶことができる	
11	新しい友人ができる	大学への社会的統合
12	APUコミュニティの一員だと感じる	

2.2 授業方法

1回の授業（95分）は、教員によるクラス全体への講義（約30分）と、小クラスに分けておこなわれる演習（約60分）の組み合わせを基本としている。ただし、回によっては小クラスで

の演習のみという場合もある。小クラス演習は TA によってファシリテートされ、その際、教員は小クラスを巡回しながら必要に応じて指導や助言をおこなう。この授業方法はオンライン授業においてもそのまま引き継がれた。ただし、対面授業で講義を大教室、小クラス演習を小教室でおこなっていたところを、オンライン授業では講義を Zoom のメインルーム (MR)、小クラス演習を Zoom のブレイクアウトルーム (BR) でおこなった。また、オンライン授業では、毎回、最初と最後は全員が Zoom のメインルーム (MR) に集まるようにした。

2020 年度前期のオンライン授業と課題のスケジュールを表 2 に示す。0 回目の授業が 2 回あるが、これは「開講前ガイダンス」を 2 回おこなったことを意味する。APU は、新型コロナウイルス感染拡大の状況下、前期の開講日を約 1 か月延期した。それに併せて、前期の授業回数を減らし、代わりに各科目において開講前に Zoom の使い方の確認や受講生の顔合わせを目的としたガイダンスをおこなうという措置をとった。SSAW においては、通常の第 1 回授業でおこなっていることを 2 回の開講前ガイダンスでより丁寧におこなうことができたため、正式な授業の回数は減ったものの、結果として、通常とほとんど変わらない授業スケジュールを遂行することができた。なお、課題の提出および課題に対するフィードバックはすべて manaba (学習管理システム) を通じておこなわれた。

SSAW の授業方法には 2 つの大きな特徴がある。1 つは、学部生 TA の登用である。初年次セミナーにおいて授業支援者として活用される学部上級生は、自身が高校生から大学生への転換を経験して間もないということから、新入生である受講生に好影響をもたらす存在となる (立山 2013)。SSAW の TA には、その中でも特に、身近な相談相手、モチベーター (やる気を引き出す人)、主体的な学習者としてのロールモデル、教員・受講生間そして受講生同士のコミュニケーションの促進者といった役割が期待されている。したがって、TA に対しては、受講生に技能を伝達することよりも、受講生が安心して主体的・協調的に活動できるような場づくりに注力するよう指導している。

もう 1 つの特徴は、協調学習を軸としているところである。協調学習は、個別学習や競争的学習よりも学習効果が高いことが理論的・実証的に示されている (Johnson and Johnson 2005)。他者との相互作用によって学びが促進される協調学習は、他者との競争関係の中で個別学習を続けてきた新入生に対して様々な効果を発揮する。入学したばかりの 1 回生には人間関係を新しく構築しようとする親和動機が働くことから、協調学習は居場所やつながりを作ることに効果があり、また、それが進んで学びへの動機づけをもたらす (森 2009, 森・山田 2009)。また、他者との相互作用を通して、学習すべき事柄を学習者自身が築き上げていくことが基本となる協調学習は、大学におけるレポートライティングの授業において有効であることを示す実証研究もある (鈴木 2009)。このことを踏まえ、SSAW においては、与えられたテーマについて受講生一人ひとりが 2000 字程度のレポートを作成することを目標として、グループで問いや論証方法を検討したり、ペアでレポートを相互評価したり、クラスメイト同士でレポートの内容について発表やフィードバックをするなどの活動を取り入れている。

3 結果

上述したオンラインによる SSAW の実践の効果を検証するための資料として、全授業の後に受講生または TA を対象に実施した 3 つのアンケートの概要と結果を以下に示す。

3.1 受講生アンケートの概要と結果

このアンケートは、SSAW の日本語基準全 11 クラスの全受講生を対象として (N = 656)、

表 2 2020 年度前期のオンライン授業と課題のスケジュール

回	授業	課題
0	(MR) 教員・TA の自己紹介、科目概要の説明 (BR) 小クラスに分かれてアイスブレイク (MR) まとめ、連絡	目標設定エッセイ (個人課題)
0	(MR) 本日の活動の説明 (BR) 小クラスに分かれて目標の発表 (MR) まとめ、連絡	
1	(MR) 学術的文章の特徴について講義 (BR) グループに分かれて論証の練習 (MR) まとめ、連絡	5 段落論文 (個人課題)
2	(MR) 本日の活動の説明 (BR) グループに分かれて 5 段落論文の相互評価 (MR) まとめ、連絡	5 段落論文の修正稿 (個人課題)
3	(MR) 研究のプロセスについて講義 (BR) グループに分かれてテーマの絞り込み (MR) まとめ、連絡	検索文献のレジュメ (個人課題)
4	(MR) 本日の活動の説明 (BR) グループに分かれて検索文献の検討 (MR) まとめ、連絡	問いリスト (個人課題)
5	(MR) 問いの立て方について講義 (BR) グループに分かれて問いの設定 (MR) まとめ、連絡	研究計画書① (グループ課題)
6	(MR) 論証の方法について講義 (BR) グループに分かれて論証方法の検討 (MR) まとめ、連絡	研究計画書② (グループ課題)
7	(MR) 本日の活動の説明 (BR) 5 グループ× 2 に分かれて研究計画発表会 (MR) まとめ、連絡	グループメンバーの相互評価 (個人課題) レポートのアウトライン原案 (個人課題)
8	(MR) 本論の書き方について講義 (BR) 小クラスに分かれてレポートアウトラインの作成 (MR) まとめ、連絡	レポートのアウトライン (個人課題) 引用の練習 (個人課題)
9	(MR) 引用の仕方について講義 (BR) 小クラスに分かれてレポート初稿の作成 (MR) まとめ、連絡	レポートの初稿 (個人課題)
10	(MR) レポート作成 Q&A (BR) 小クラスに分かれてレポート初稿の相互評価 (MR) まとめ、連絡	レポートの修正稿 (個人課題)
11	(MR) 先輩学生の講演、プレゼンテーションの仕方について講義 (BR) 小クラスに分かれてレポート発表スライドの作成 (MR) まとめ、連絡	レポートの発表スライド (個人課題)
12	(MR) 本日の活動の説明 (BR) 小クラスに分かれてレポート発表会 (MR) まとめ、連絡	
13	(MR) 本日の活動の説明 (BR) 小クラスに分かれてレポート発表会 (MR) まとめ、連絡	レポートの最終稿 (個人課題) 振り返りエッセイ (個人課題) アンケート (個人課題)

2020年8月5日から8月11日までの期間、manabaのアンケート機能を用いておこなった。受講生にはこのアンケートを最終課題の1つとして課した。回答者は618名、回答率は94.2%であった。設問は全部で20個あり、多肢選択式と自由記述式が含まれる。多肢選択式設問においては、SSAWの到達目標（表1）についての自己評価、学びに好影響を与えた授業活動、オンライン（Zoom）であるがゆえに難しかったことなどについて尋ねた。一方、自由記述式においては、学びに好影響を与えたTAや仲間の言動や態度、今後もオンライン（Zoom）で授業がおこなわれるという前提でSSAWにおいて改善してほしいことなどについて尋ねた。

図1は、SSAWの到達目標（表1）を達成できたと思うかという設問（単一選択）に対する回答の分布を表したものである。この図からわかるように、「とてもそう思う」または「ある程度そう思う」と回答した者、つまり肯定的に自己評価した者の割合が「大学で学ぶための技能」に関連するすべての到達目標（1～7）において8割を超えている。一方で、「大学で学ぶための態度」と「大学への社会的統合」に関連する到達目標（8～12）においてはいずれも8割以下となっている。後者の到達目標について肯定的に自己評価した者の割合が特に少ないのが「大学で学ぶことに対する不安が和らぐ」（到達目標8、60.2%）と「APUコミュニティの一員だと感じる」（到達目標12、65.3%）となっている。

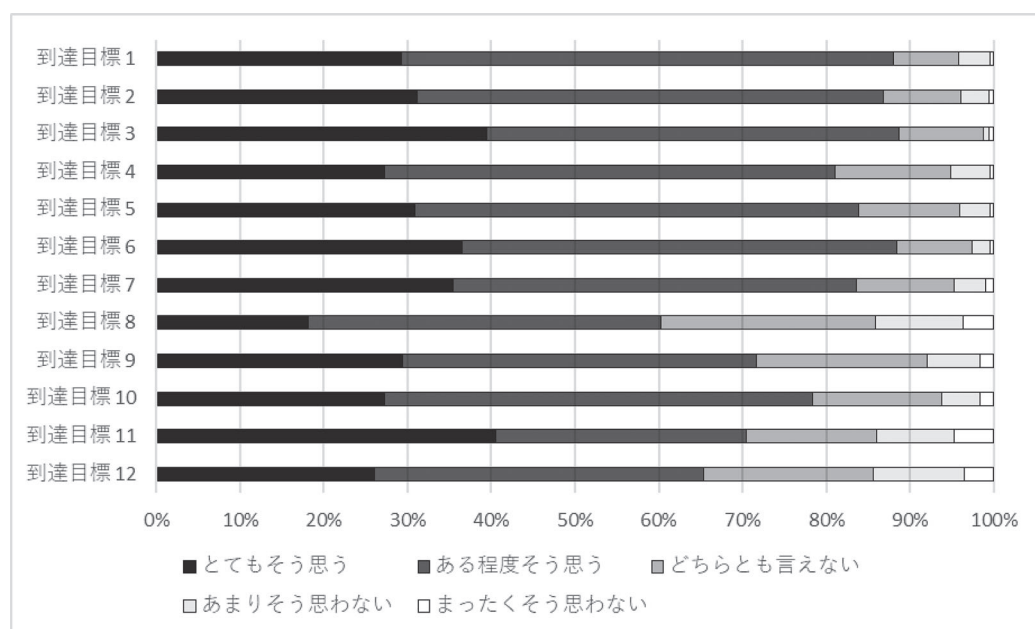


図1 到達目標を達成できたと思うかという設問に対する回答

図2は、「この授業においてあなたの学びに好影響を与えた活動とは？」という設問（複数選択可）に対する回答の分布を表したものである。この図からわかるように、選択者の割合が最も大きかった授業活動は「グループワークやペアワーク」（77.7%）であり、その後に「TAによる小クラスサポート」（56.8%）、「TAによる個別サポート」（38.5%）が続いている。

表3は、上で選択肢として挙げられている授業活動（「その他」を除く）と、到達目標につい

ての受講生の肯定的自己評価との関係をパーセントで示したクロス集計表である。前者を独立変数として列（縦）に、後者を従属変数として行（横）に配置している。各行において数値が大きい列の項目ほど、その行の項目に影響しているということになる。視覚的にわかりやすくするために、各行において数値が最も大きいセルを濃い色、数値が2番目に大きいセルを薄い色でハイライトしている。ここから読み取れることは、全体的に、到達目標についての受講生の肯定的自己評価に最も影響を及ぼしたのは教員による活動であり、それと比べて、TAによる活動や仲間との活動が及ぼした影響は限定的ということである。TA活動の有効性がうかがえるのは「大学で学ぶことに対する不安が和らぐ」（到達目標8）という点である。一方、仲間との活動の有効性が確認できるのは「新しい友人ができる」（到達目標11）という点である。

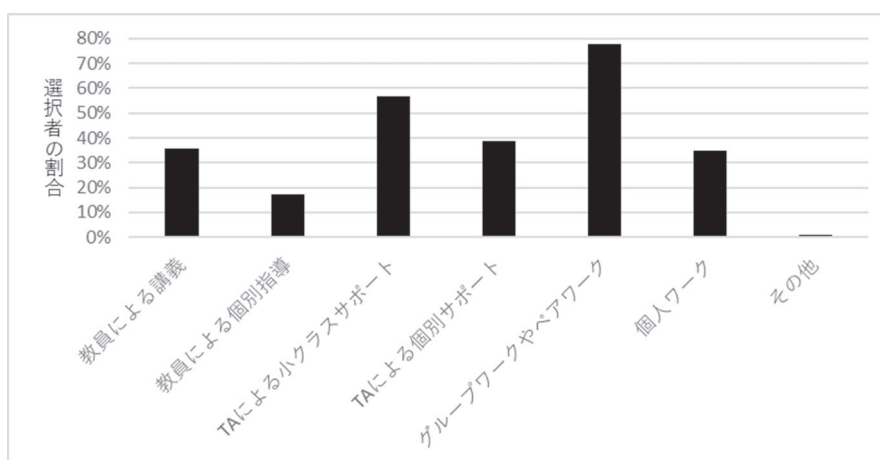


図2 学びに好影響を与えた授業活動についての設問に対する回答

表3 授業活動と到達目標についての受講生の肯定的自己評価との関係

到達目標についての受講生の肯定的自己評価	授業活動					
	教員による講義	教員による個別指導	TAによる小クラスサポート	TAによる個別サポート	グループワークやペアワーク	個人ワーク
到達目標1	92.7%	93.5%	90.9%	86.1%	90.0%	94.4%
到達目標2	95.5%	92.5%	89.7%	86.6%	88.5%	91.2%
到達目標3	94.6%	88.8%	90.3%	89.9%	90.4%	89.8%
到達目標4	87.3%	80.4%	84.1%	80.3%	82.3%	85.6%
到達目標5	87.3%	88.8%	86.9%	83.2%	85.00%	87.0%
到達目標6	96.4%	95.3%	91.5%	88.7%	90.0%	91.6%
到達目標7	88.2%	92.5%	87.2%	86.6%	85.0%	86.1%
到達目標8	73.6%	71.0%	65.2%	82.3%	62.9%	61.9%
到達目標9	83.6%	81.3%	75.8%	74.8%	75.0%	75.8%
到達目標10	81.8%	78.5%	81.2%	79.4%	81.9%	82.3%
到達目標11	74.6%	73.8%	75.8%	74.8%	76.3%	68.4%
到達目標12	71.8%	74.8%	70.7%	69.3%	71.3%	67.9%

図3は、「この授業においてオンライン（Zoom）であるがゆえに難しかったこととは？」という設問（複数選択可）に対する回答の分布を表したものである。この図からわかるように、選択者の割合が最も大きかった難点は「仲間との関係構築」（57.0%）であり、その後に「仲間との意思疎通」（54.4%）、「仲間との合意形成」（46.8%）が続いている。一方で、「TAとのコミュニケーション」が難しかったと思う者の割合は最も少なかった（24.9%）。

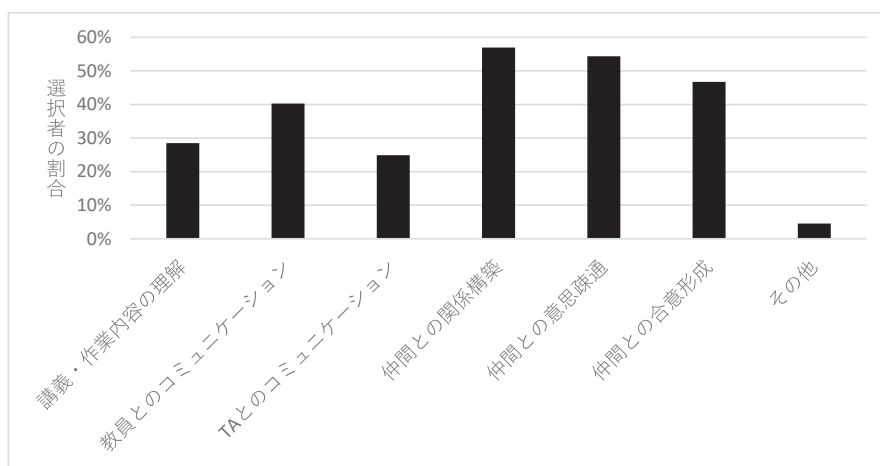


図3 オンライン（Zoom）であるがゆえに難しかったことについての設問に対する回答

表4は、上で選択肢として挙げられている、オンライン（Zoom）であるがゆえの難点（「その他」を除く）と、到達目標についての受講生の否定的自己評価（「あまりそう思わない」または「まったくそう思わない」という回答）との関係をパーセントで示したクロス集計表である。前者を独立変数として列（縦）に、後者を従属変数として行（横）に配置している。各行において数値が大きい列の項目ほど、その行の項目に影響しているということになる。視覚的にわかりやすいように、各行において数値が最も大きいセルを濃い色、数値が2番目に大きいセルを薄い色でハイライトしている。ここから読み取れることは、全体的に、到達目標についての受講生の否定的自己評価に最も影響を及ぼしたのは、仲間とのコミュニケーションの難しさである。他方で、TAとのコミュニケーションの難しさは、到達目標についての受講生の否定的自己評価にあまり影響をしていないことがわかる。

「この授業においてあなたの学びに好影響を与えたTAの言動や態度とは？」という設問に対しては、グループワークがうまくいくような働きかけに関する記述が目立った。主な内容として2つある。1つは、TAによるグループの雰囲気づくりである。場を盛り上げようとするフレンドリーで明るい振る舞い、質問しやすい・親しみやすい・相談しやすい環境づくり、TA自身の授業を楽しむ態度、グループ内でのアイスブレイクの実施、授業外でのオンラインによる交流の場の設定・参加などが挙げられていた。もう1つは、TAによるグループディスカッションへの介入である。グループメンバー全員が発言できるように促したり、グループの意見をうまくまとめたり、時にはリーダーシップを発揮したり、受講生に適度にアドバイスを与え考えさせたことなどが報告されていた。

表4 オンライン（Zoom）であるがゆえの難点と到達目標についての受講生の否定的自己評価との関係

到達目標についての受講生の否定的自己評価	オンライン（Zoom）であるがゆえの難点					
	講義・作業内容の理解	教員とのコミュニケーション	TAとのコミュニケーション	仲間との関係構築	仲間との意思疎通	仲間との合意形成
到達目標1	5.1%	4.0%	3.9%	5.4%	4.5%	5.9%
到達目標2	6.8%	4.8%	4.6%	4.6%	4.8%	5.5%
到達目標3	1.1%	1.2%	1.3%	1.4%	1.2%	1.7%
到達目標4	5.1%	6.0%	5.8%	5.4%	6.0%	5.5%
到達目標5	4.6%	4.8%	4.6%	4.6%	5.1%	3.5%
到達目標6	5.1%	2.8%	2.0%	2.3%	3.3%	3.1%
到達目標7	5.7%	5.2%	5.8%	6.8%	5.7%	6.6%
到達目標8	16.5%	15.7%	16.2%	16.8%	17.3%	18.3%
到達目標9	6.3%	7.2%	6.5%	9.7%	8.0%	8.7%
到達目標10	7.4%	6.0%	7.1%	7.1%	6.9%	7.6%
到達目標11	11.4%	14.1%	16.2%	19.0%	14.9%	16.3%
到達目標12	14.8%	14.1%	13.0%	16.5%	18.5%	17.3%

「この授業においてあなたの学びに好影響を与えた仲間の言動や態度とは？」という設問に対しては、仲間から刺激を受けたという内容が多かった。メンバーの積極的な発言・態度、協力的な態度、他者の意見をしっかりと聞き尊重する態度、励まし合う態度、前向きでグループの雰囲気をよくする言葉がけ、授業外ミーティングの積極的参加、自分が持っていない知識・視野・発想、助け合う精神、リーダーシップ、苦手なことを克服しようとする姿、語彙力、コミュニケーション・プレゼンテーション能力、フィードバックの仕方、最後まで諦めない姿、建設的なアドバイスなどが挙げられていた。これらの言動や態度に対し、「学びとなった」「刺激を受けた」「自分にできることは何か考えるようになった」「視野を広げることができた」「新たな発見や気づきにつながった」「見習いたいと思った」「モチベーションを上げることができた」「お互いに高め合うことができた」「まだ会ったことがないとは思えないくらいの信頼感が持てた」「感謝している」「そのような存在になりたいと思った」というような感想が述べられていた。

「今後もオンライン（Zoom）で授業がおこなわれるという前提でSSAWにおいて改善してほしいこととは？」という設問に対する回答で圧倒的に多かったのが、仲間との関係構築・意思疎通に関わる内容であった。その内容は主に2つある。1つ目は、グループワークの前にアイスブレイクの時間をしっかりとってほしいということである。ある受講生は「信頼関係の構築をまずやらないとグループワークは難しい」ことを強調している。別の受講生は「関係性構築が最も難しく、最初の三回くらいでもいいので、慣れるまでは打ち解けられるアクティビティーが授業内であるととても助かる」と具体的な提案をしている。2つ目は、Zoomのブレイクアウトルームではカメラとマイクをオンにすることを徹底すべきという意見である。ある受講生は、その理由として「カメラオフでマイクもミュートの人がグループにいと少し話しにくくなる」と述べている。別の受講生は「皆カメラをオフにしている、暗い画面に向かって話しているときがあったので、みんなの画面ONを義務付けるなど、グループ活動での意思疎通を円滑にするために工夫が必要」と踏み込んだ主張をしている。

3.2 TA アンケートの概要と結果

このアンケートは、SSAW の日本語基準全 11 クラスの全 TA を対象として (N = 55)、2020 年 8 月 5 日から 8 月 11 日までの期間、manaba のアンケート機能を用いておこなった。回答者は 41 名、回答率は 74.5% であった。設問は全部で 15 個あり、多肢選択式と自由記述式が含まれる。多肢選択式設問においては、受講生の学びへの貢献度についての自己評価、TA として活動するなかでオンライン (Zoom) であるがゆえに難しかったことなどについて尋ねた。一方、自由記述式においては、受講生の学びを支援・促進するためにしたこと、今後もオンライン (Zoom) で授業がおこなわれるという前提で SSAW において改善してほしいことなどについて尋ねた。

図 4 は、受講生の学びにどのくらい貢献できたと思うかという設問 (単一選択) に対する回答の分布を表したものである。この図からわかるように、「とても貢献できた」または「ある程度貢献できた」と回答した者の割合が高い項目は順に「大学で学ぶことに対する不安が和らぐ」(90.2%)、「TA (自分) とのコミュニケーション」(87.5%)、「講義・作業内容の理解」(82.9%) となっている。一方で、低い項目は順に「APU コミュニティの一員だと感じる」(25.0%)、「教員とのコミュニケーション」(50.0%)、「仲間との合意形成」(54.1%) となっている。

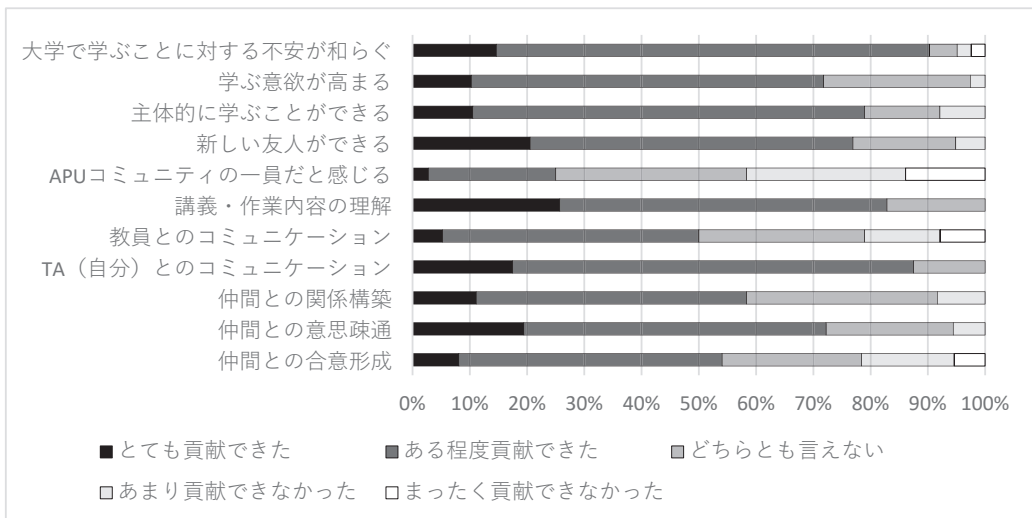


図 4 受講生の学びにどのくらい貢献できたと思うかという設問に対する回答

図 5 は、「TA として活動するなかでオンライン (Zoom) であるがゆえに難しかったことは？」という設問 (複数選択可) に対する回答の分布を表したものである。この図からわかるように、選択者の割合が最も大きかった難点は「受講生との関係構築」(78.0%) であり、その後に「小クラスの雰囲気づくり」(75.6%)、「受講生との意思疎通」(53.7%) が続いている。一方で、他の TA や教員とのコミュニケーションが難しかったと思う者の割合は少なかった (いずれの項目も 3 割以下)。

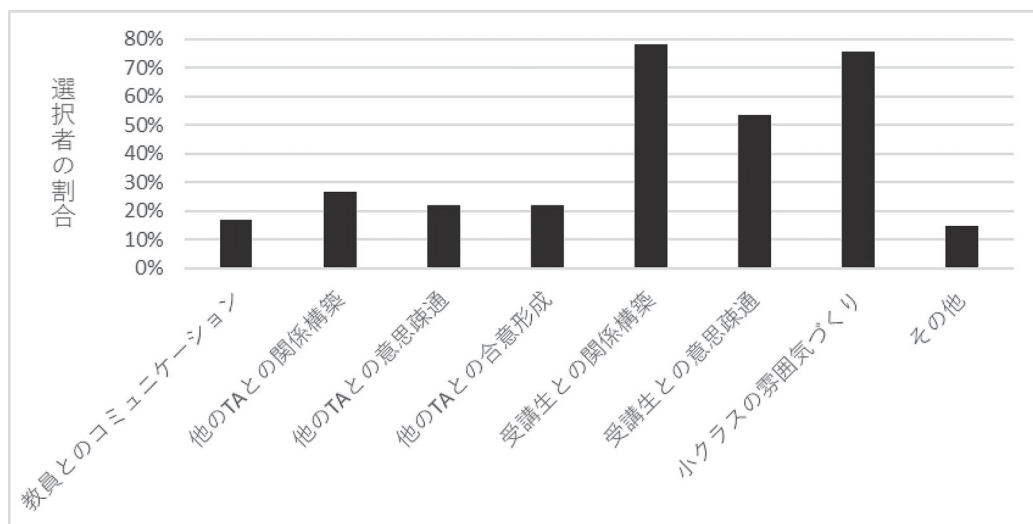


図5 TA活動のなかでオンライン（Zoom）であるがゆえに難しかったことについての設問に対する回答

受講生の学びを支援・促進するためにしたことを尋ねる設問に対しての回答は、授業時間内の工夫と授業時間外の工夫に分けられる。前者については、アイスブレイク、雑談時間の確保、受講生主導の話し合い、対話の促進、イベントなどの紹介が挙げられていた。多くのTAにより実践された「アイスブレイク」では、例えば、お互いの興味関心を共有し、受講生間でつながりを持つことができるようにすることや、日頃あまり話さない者同士が話することができるようにするなど、意図的な工夫がみられた。また、対面授業では受講生間で何気ない会話が交わされるが、オンラインではそのような気軽な会話が容易ではないため、TAは授業内や授業直後に「雑談時間の確保」をおこなっていたようである。「学生主導の話し合い」は、特に受講生同士の意思疎通や関係構築のためにおこなっていたTAが多い。受講生の中でファシリテーターを決めて、自分たちで議論や合意形成をおこなうなどの責任を与えることで、受講生間の対話や関係性の促進に努めていたTAもいた。また、TAによっては、授業前日にファシリテーターに連絡をとり、グループディスカッションでの留意点（理解していない人がいないかその都度確認すること、皆の意見を聞くことなど）を伝えたり、毎週ファシリテーターを変えていた。「対話の促進」については、Zoomのカメラとマイクをオンにしてもらう、話し合いが終わってもカメラをオフにせずに対話を続けてもらう、グループ内の異なる人との会話を促進するなどが挙げられていた。「イベントの紹介」については、人とのつながりが増えるように、1回生向けのイベントやサークル、プログラムを紹介しているケースがみられた。授業時間外の工夫としては、Zoomによるオンライン交流会とSNSを使った交流が報告されていた。「Zoomによるオンライン交流会」はほとんどのTAにより実施されており、その内容は、アイスブレイクだけでなく、夕食会、相談会、先輩・知人の紹介、英語学習法の話など様々であった。「SNSを使った交流」については、TAなしのLINEグループを作ってもらう、授業でのペアワークをLINEでおこなってもらう、あまり話さない者同士でLINEのペアを作るなどの工夫が凝らされていた。

「今後もオンライン（Zoom）で授業がおこなわれるという前提でSSAWにおいて改善してほしい

いこととは？」という設問に対する回答で圧倒的に多かったのが、やはり受講生同士および受講生との関係構築・意思疎通に関わる内容であった。その内容は主に2つある。1つは、アイスブレイクの時間を十分確保してほしいということである。アイスブレイクの必要性について、あるTAは「SSAWは論文の書き方を学ぶと同時にグループワークを通して先輩や同級生との交流の輪を広げるためにとても大切な授業だと思うので、その関係構築の面は一番解決すべき点である」と述べている。また、別のTAは「ボディランゲージや元気さ温もりさが伝えづらいオンラインでは、初対面から仲良くなるまでに時間がかかる。頼れるTAとして認識されづらい」と感じている。もう1つは、Zoomのカメラをオンにすることをルール化してほしいということである。その理由として「受講生の表情が見れないと、理解しているのか分からない」「本当に話を聞いているのかわからない」「ビデオオンにすることでグループメンバーの存在を感じることができる」などが挙げられていた。

3.3 全学共通の授業評価アンケート（受講生対象）の概要と結果

このアンケートは、APUにおいて学期（セメスターまたはクォーター）ごとに全開講科目で受講生を対象に実施される授業評価アンケートであり、その内容は全学共通となっている。表5に示すように、アンケートの項目は合わせて27個あり、それらが意味的に1) 学生の学び、2) (教員の) 姿勢、関わり、熱意、3) 授業設計、4) アクティブラーニング、5) 学びの深み・広がり、6) 課題、7) 全体という7つのカテゴリーに分類されている。受講生は、これらの各項目について5段階評価をおこなうことになっている。

図6は、2019年度前期および2020年度前期にSSAW（日本語基準）を担当した筆者ら3名のクラスの授業評価アンケートの結果をまとめ、アンケート項目のカテゴリーごとに2つの年度で比較したものである。2019年度前期の3クラスの回答者は151名、回答率は82.1%、2020年度前期の3クラスの回答者は148名、回答率は83.1%であった。グラフの数値は、「全くそう思わない」を1点、「そう思わない」を2点、「どちらともいえない」を3点、「そう思う」を4点、「非常にそう思う」を5点として算出した5段階評価の加重平均値を表す。この図からわかるように、すべてのカテゴリーにおいて、対面で授業がおこなわれた前年度と比べ、オンラインで授業がおこなわれた2020年度前期で受講生の評価が高くなっている。評価の上昇が最も高いのが「学生の学び」(0.31)であり、その後に「課題」(0.23)、「アクティブラーニング」(0.22)、「学びの深み・広がり」(0.14)、「授業設計」(0.12)、「(教員の) 姿勢、関わり、熱意」(0.11)、「全体」(0.11)が続く。

4 考察

受講生アンケートの結果から、2020年度前期のオンライン（Zoom）によるSSAWは、受講生が大学で学ぶための技能、すなわちスタディスキルを習得するにはある程度有効であった一方で、大学で学ぶための態度の形成と大学への社会的統合という意味では比較的有効性が低かったことがわかる。特に有効性が低かった点が、大学の学びに対する不安の解消とAPUへの帰属意識の醸成である。このような結果になった理由として、先行研究で裏付けられた、初年次セミ

「With コロナ」時代における初年次セミナーのあり方

ナーにおける学部生 TA の活用と協調学習の多様な効果が、オンライン授業であるがゆえに限定的にしか表れなかったということがうかがえる。受講生アンケートの結果から、受講生は TA による働きかけや他の受講生との対話があったことを強く認識していることがわかる。また、TA アンケートの結果からも、TA が受講生に対して積極的にコミュニケーションを図ったことがわかる。しかし、それと同時に、受講生および TA が、そのような活動をオンラインでおこなうことの難しさを痛感したことも同じアンケート結果から読み取れる。学部生 TA の活用にしる、協調学習にしる、当然のことながら、良好な人間関係を前提としている。対面であれば、見ず知らずの人であっても、相手がどのような人が雰囲気である程度わかるため、コミュニケーションがはかどり、信頼関係を構築しやすい。一方、オンラインになると、相手を理解するのに視覚と聴覚のみに頼らざるを得ず、画面越しに相手がいるとしても、心理的な距離を感じざるを得ない。また、コミュニケーションがとれたとしても、「3 次元的交流が無い分、質量的感覚に乏しい」(あ

表 5 授業評価アンケートの項目とその分類

	項目	カテゴリー
1	この授業の内容は、知的好奇心を刺激するものであった	学生の学び
2	この授業を通して、何らかの価値のあることを学ぶことが出来た	
3	この授業の内容は、この科目が扱っている分野への関心を高めるものであった	
4	この授業の内容を理解して修得することができた	
5	教員は熱意を持って授業を行った	姿勢、関わり、熱意
6	教員の教え方は興味をひくものであった	
7	教員は受講生に誠実に接した	
8	教員は授業内外の時間で受講生が質問しやすい雰囲気を作っていた	
9	教員はオフィス・アワーや授業後に受講生からの質問や相談を受け付けていた	授業設計
10	教員の説明は分かりやすかった	
11	教材はよく工夫されたもので、その説明も丁寧であった	
12	授業内容がシラバスに記載された目的に沿っていたため、授業の進み具合がわかった	
13	教員は受講生がノートを自分なりに取りやすいように授業を行っていた	
14	初回授業で行われたシラバスの説明は分かりやすかった	
15	授業方法は、受講生が学習目標を達成するために適切であった	アクティブラーニング
16	受講生は授業中のディスカッションなどに積極的に参加するよう促された	
17	受講生は自分の意見や知識を共有することを求められた	
18	受講生による質問が奨励され、質問に対して有意義な回答を得られた	
19	教員は授業中に多様な背景を持つ受講生の学び合いを促進する働きかけを行っていた	学びの深み・広がり
20	教員は様々な理論・考え方・概念の捉え方などを比較しながら説明した	
21	教員は授業で取り上げた理論・考え方・概念の背景や由来を説明した	
22	教員は適宜自分の考え方以外の見解も伝えていた	
23	教員はその学問分野における最近の動向を十分に議論した	課題
24	課題読書や教科書は有益なものであった	
25	資料や宿題は科目の深い理解のために役立った	
26	APU で受けた他の授業と比べて、この授業は…	全体
27	全体的にこの授業は…	

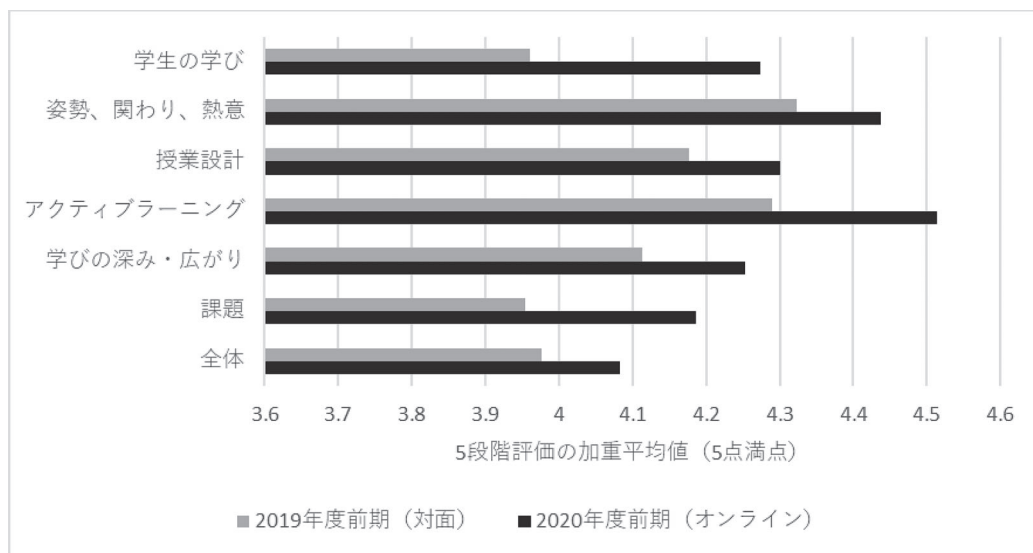


図6 授業評価アンケートの結果の項目カテゴリーごとの対前年度比較

る受講生の自由記述より引用) ため、信頼関係の構築が難しい。よって、オンラインによるSSAWにおいて学部生TAの活用と協調学習の効果が期待したほど出なかったという結果は決して驚くべきことではない。

当然、今回のオンライン授業の効果検証は、それ以前の対面授業との比較なしには不十分である。しかし、上述の受講生アンケートおよびTAアンケートは、授業が急遽オンラインになった今回、その効果を測定するために特別におこなったものであるため、それに対して直接的に比較検討できる資料は存在しない。学期ごとに実施される全学共通の授業評価アンケートはあるものの、今回特別に実施した受講生アンケートのような、到達目標に沿って細かい測定をおこなうものではない。しかしながら、授業評価アンケートの結果は、上述の考察を裏付けているようにも読み取れる。「学生の学び」に分類されるアンケート項目は、授業の内容に対する認知レベルを評価するものであり、SSAWで言えば、スタディスキルの習得の度合いを評価するものである。他方、「全体」に分類されるアンケート項目は、授業全体に対する満足度を評価するものであり、SSAWで言えば、スタディスキルの習得、大学で学ぶための態度の形成、大学への社会的統合のすべての側面に対する達成感や充実感を評価するものである。このことを前提とすれば、2020年度前期のSSAWにおいて、前年度比で「学生の学び」の評価の上昇が最も高く、「全体」の評価の上昇が最も低かったという結果は、対面授業からオンライン授業になったことで、SSAWはスタディスキルの習得に効果をより発揮した一方で、大学で学ぶための態度の形成と大学への社会的統合という側面ではさほど効果を発揮しなかったと解釈することもできる。

では、今回の実践の結果を踏まえ、これからの「With コロナ」時代に、SSAWを対面だけでなくオンラインでも有効な初年次セミナーにしていくための今後の課題とは何か。それは、オンライン授業においても学部生TAの活用と協調学習の多様な効果を追求できるように受講生間および受講生・TA間の関係構築・意思疎通を促進することである。

そのために具体的に何ができるか。少なくとも4つ挙げられる。第1に、アイスブレイクをもっと時間をかけて、より丁寧におこなうことである。対面授業の時は、初回授業でアイスブレイクの時間をとるだけで事足りていたが、オンライン授業においてはそれでは不十分であることが明白になった。第2回授業以降もしばらくは、アイスブレイクのために一定の時間を確保する必要がある。また、アイスブレイクの内容に創意工夫が求められる。対面授業の際は、動いたり体を使ったりするゲームなども含め、選択肢は豊富だが、オンラインの場合は現時点では選択肢が限られる。したがって、オンラインで有効なアイスブレイクの手法の開発・導入が急がれる。

第2に、Zoomのカメラとマイクのオン・オフ問題を解決することである。一案としては、小クラスやグループ単位で、授業中のグラウンドルール（参加者全員が守るべき行動規範）を話し合って決める機会を設け、その中に「特別な事情がなければ、ブレイクアウトルームではZoomのカメラとマイクをオンにする」というようなルールが含まれることを期待することである。そうすれば、教員のほうで「義務化」をする必要はなくなる。教員としては、学生にルールを押し付けるより、学生の主体性を引き出したいところである。主体的な学習者への転換が求められる新入生に対してはなおさらである。

第3に、今回のオンライン授業の実践から生まれたグッドプラクティス（優れた取り組み）を受講生およびTAに周知することである。受講生アンケートの自由記述から、一部のTAの受講生への働きかけがうまく作用していたことや、一部の受講生間で相互作用がうまく働いていたことがうかがえる。このような情報を集め、事例集を作成し、受講生およびTAに参考資料として配布するとよいであろう。

最後に、受講生およびTAに対して、オンラインで有効な対人コミュニケーションスキルを指導することである。受講生アンケートとTAアンケートの両方の自由記述に、オンラインでの関係構築・意思疎通が難しいのは仕方がないというような主旨の記述がいくつかあった。しかし、これはスキルを身につければある程度解決できる問題であるという認識が必要である。対人コミュニケーションで基本となるのが傾聴である。相手が自分の話をしっかり聴いてくれば、誰もが承認されたと感じ、さらに話したくなる。ただし、そこには相手の「しっかり聴いている」という反応がなければならぬ。ところが、オンラインでは、相手の反応がわかりにくくなる。そこで有効なのが相槌であり、これに目線や動作を付け加え、少しオーバーにすると更に効果的となる（堀 2018：90-103）。また、オンラインでは、間合いや空気感が十分に伝わりにくいため、以心伝心ではなく、できるだけ言葉でやりとりをするのがよい（堀 2018：59）。このようなスキルを受講生に実践的に指導していく必要がある。

5 おわりに

これまで2020年度前期にオンライン（Zoom）で実施されたAPUの初年次セミナーの実践とその結果をみてきた。他大学における実践とその結果についてはこれから明らかになってくるはずであるが、程度の差こそあれ、同様の結果がみられるであろうことは想像に難くない。今、初年次教育に携わる大学教職員が早急に取り組まなければならないことが2つある。まず、2020年度春の入学生に対して、大学で学ぶための態度の形成（特に、大学の学びに対する不安の解

消)と大学への社会的統合(特に、大学への帰属意識の醸成)を促進するような補習的措置をおこなうことである。もう1つは、それぞれの大学の状況に応じて、「With コロナ」時代における初年次セミナーのあり方を検討することである。本稿がその際の1つの参考資料となれば幸いである。

引用文献

- eラーニング戦略研究所「大学におけるオンライン授業の緊急導入に関する調査報告書」(<https://www.digital-knowledge.co.jp/archives/22823/>, 2020.8.20)
- Johnson, D.W., and Johnson, R.T. "New Development in Social Interdependence Theory." *Genetic, Social, and General Psychology Monographs*, No. 131 (4), 2005, pp. 285-358.
- 河合塾『初年次教育でなぜ学生が成長するのか：全国大学調査からみえてきたこと』東信堂、2010年。
- 堀公俊『ファシリテーション入門』、第2版、日本経済新聞出版社、2018年。
- 森朋子「初年次における協調学習のエスノグラフィ」『日本教育工学会論文誌』第33号(1)、2009年、31-40頁。
- 森朋子・山田剛史「初年次教育における協調学習が及ぼす効果とそのプロセス：学生同士の〈足場づくり〉を中心に」『京都大学高等教育研究』第15号、2009年、37-46頁。
- 鈴木宏昭編著『学び合いが生み出す書く力：大学におけるレポートライティング教育の試み』丸善、2009年。
- 立山博邦「大学におけるスチューデント・アシスタント(SA)制度の考察：日米比較の視点から」『社会システム研究』第26号、2013年、137-150頁。
- U.S. Department of Education. *Evaluation of Evidence-Based Practices in Online Learning: A Meta-Analysis and Review of Online Learning Studies*. Washington, D.C., 2010.

The First-Year Seminar in the “With Corona” Era:

A Case of Ritsumeikan Asia Pacific University

TATEYAMA Hirokuni (Associate Professor, Education Development and Learning Support Center, Ritsumeikan Asia Pacific University)

CUTTING Miki (Associate Professor, Education Development and Learning Support Center, Ritsumeikan Asia Pacific University)

TSUTSUI Kumiko (Associate Professor, Education Development and Learning Support Center, Ritsumeikan Asia Pacific University)

Abstract

This paper illustrates the educational practice and results of the required first-year seminar, “Study Skill and Academic Writing (SSAW),” offered online (synchronous) in the spring semester of 2020 at Ritsumeikan Asia Pacific University amid the coronavirus crisis. The purpose of this class is to have students acquire skills of academic writing and learning, build learning attitudes, and integrate socially into university. The class features the use of undergraduate TAs and collaborative learning. The purpose, learning goals, and methods of this class were thoroughly adopted to the online SSAW class. The survey shows that while the online class was effective in helping students acquire academic study skills, it was less effective in helping them build learning attitudes and integrate socially into university because the use of undergraduate TAs and collaborative learning brought limited effects due to the class being online. Based on the results, the paper considers a way forward for SSAW.

Keywords

“with corona” era, synchronous online class, first-year experience, first-year seminar, undergraduate teaching assistant, collaborative learning

